10/31
朝日

高校中退 響いた生活苦

子ども貧困

10月中旬。中退や不登校を経験した若者らが通うさいたま市の自立支援施設で、少年(17)が数学の問題を解いていた。「$-4^2\times(-3^2)$はどうなる?」。横についた男性職員に教わり、ペンを動かす。

中学で習ったはずだが記憶はおぼろ。高校卒業程度認定試験（旧大検）の合格をめざし、苦手な数学に取り組むが、「道は険しいですね」とつぶやいた。

中学の時、父親の借金で自宅が差し押さえられ、両親が離婚。子どもを引き取った母親は重いうつ病で働けず、生活保護を受けた。

少年は弟と妹の世話や家事を任された。国語や美術、社会の成績で「5」を取っても見せる相手はおらず、誕生日もクリスマスもいつもと変わらない一日。「何もかもどうでもよくなった」。絵画を学ぶ夢は心にしまい、うつ症状に苦しみ不登校に。激しい腹痛で半年近く入院もした。

卒業後は児童相談所の措置で親元を離れ、自立援助ホームで生活。定時制高校に入学し飲食店でバイトを始めたが、3カ月で中退。精神障害で生活が制限を受ける状態だと診断された。

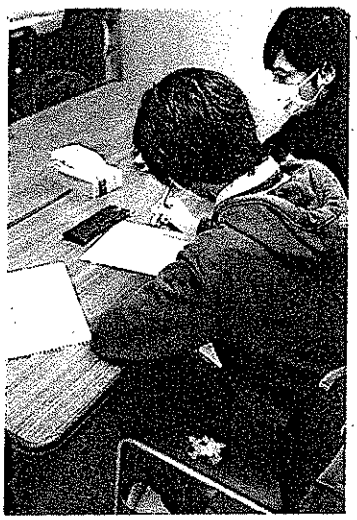
昨春から支援施設に通い、職員や医師らから受験を勧められた。いろんな人と関わるうち、「自分も同じように支援できる立場になりたい。それには学歴が必要」と感じるようになった。ただ自活できるほど貯金はなく、「まず生活を安定させないと」ともがく。

◇

生活保護世帯の子どもが平均より高い割合で高校を中退している。背景に貧困の影響を指摘する声があり、中退後の学び直しや中退を防ぐための新たな支援が始まっている。

（石原孝）

▼3面＝支援手探り



中学校で習う数学を支援施設の職員に教えてもらう少年（手前）＝さいたま市、竹花徹朗撮影